

Japanese Literature

II



現代日本の文学

芥川龍之介集

〈監修委員〉

伊藤 整

井上 靖

川端 康成

三島由紀夫

〈編集委員〉

足立 卷一

奥野 健男

尾崎 秀樹

北 杜夫

(五十音順)

学習研究社

現代日本の文学

11

芥川龍之介集

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

昭和45年3月1日 初版発行

昭和48年2月1日 十版発行

著者 芥川龍之介

発行者 古岡秀太

発行所 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-

郵便番号 145 振替東京 42400

電話 東京(720)1111 (九代)

印刷 大日本印刷株式会社

中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145) 振替
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学
電話は、東京(03) 720-1111 内線352,353か、東京
720-1111 お願いします。

© 1970 Printed in Japan

0393-164 611-1

芥川龍之介文学紀行

上高地 梓川



三年前の夏のことです。
僕は人並みにリュック・
サックを背負い、あの上
高地の温泉宿から穂高山
へ登ろうとしました。穂
高山へ登るのにはご承知
のとおり梓川を溯る外は
ありません。
(「河童」)

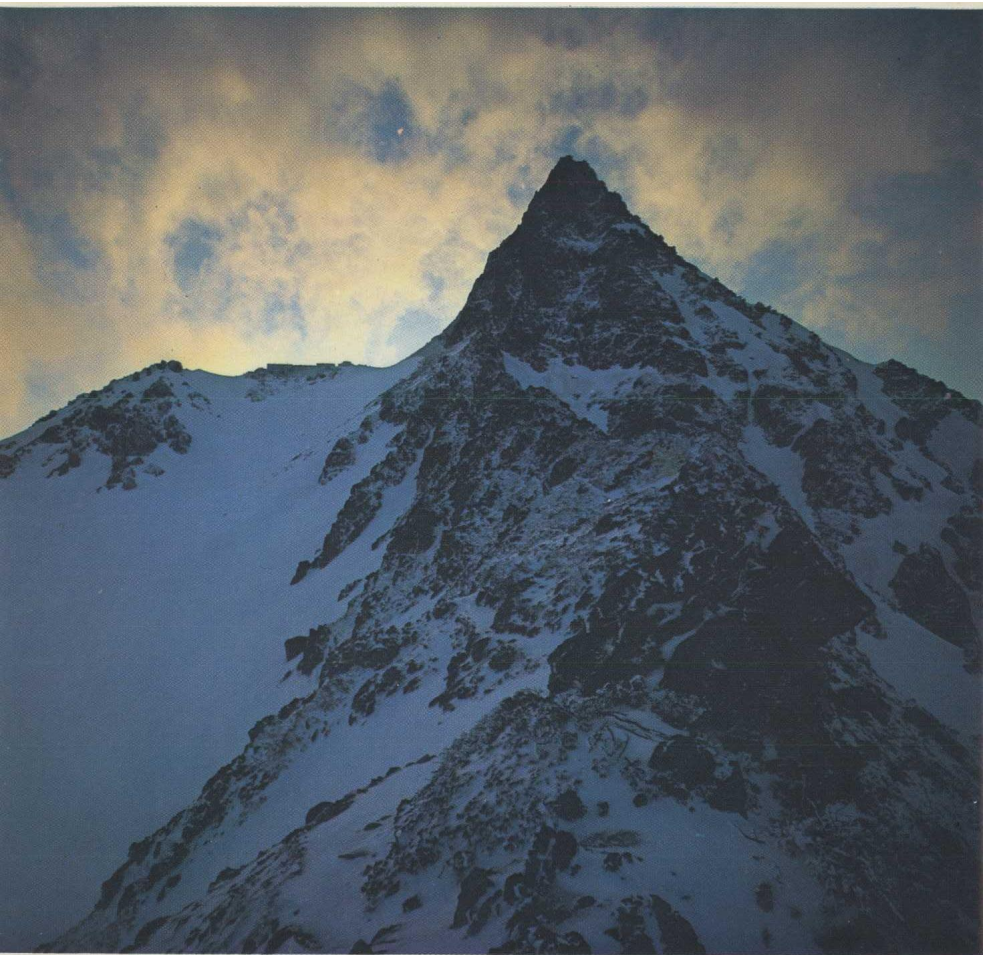


「ええ、いっそ登ってしまえ」——僕はこう
考えましたから、梓川の谷を離れないように
熊笹の中を分けて行きました。（「河童」）



上高地・梓川にそって密生した熊笹





夕闇の穂高山と梓川
（「河童」「槍ヶ嶽紀行」）

私は時々大石の上に足を止めて、いつか姿を露し出した、槍ヶ嶽の絶頂を眺めやった。絶頂は大きな石鑱のように、夕焼の余炎が消えかかった空を、いつも黒々と切り抜いていた。
（「槍ヶ嶽紀行」）



殊に大川は、^{あか}赭ちやけた粘土の多い関東平野を行きつくして、「東京」と云う大都会を静に流れているだけに、其濁つて、^な皺をよせて、氣むずかしい^{オヤ}猶太の老翁のように、ぶつぶつ口小言を云う水の色が、如何にも落付いた、人なつかしい、手ざわりのいい感じを持っている。

横網町のあたりを流れる大川（隅田川）

（「大川の水」）





溝板の上に育った僕に自然の美しさを教えたものは何よりも先に「お竹倉」だったであろう。

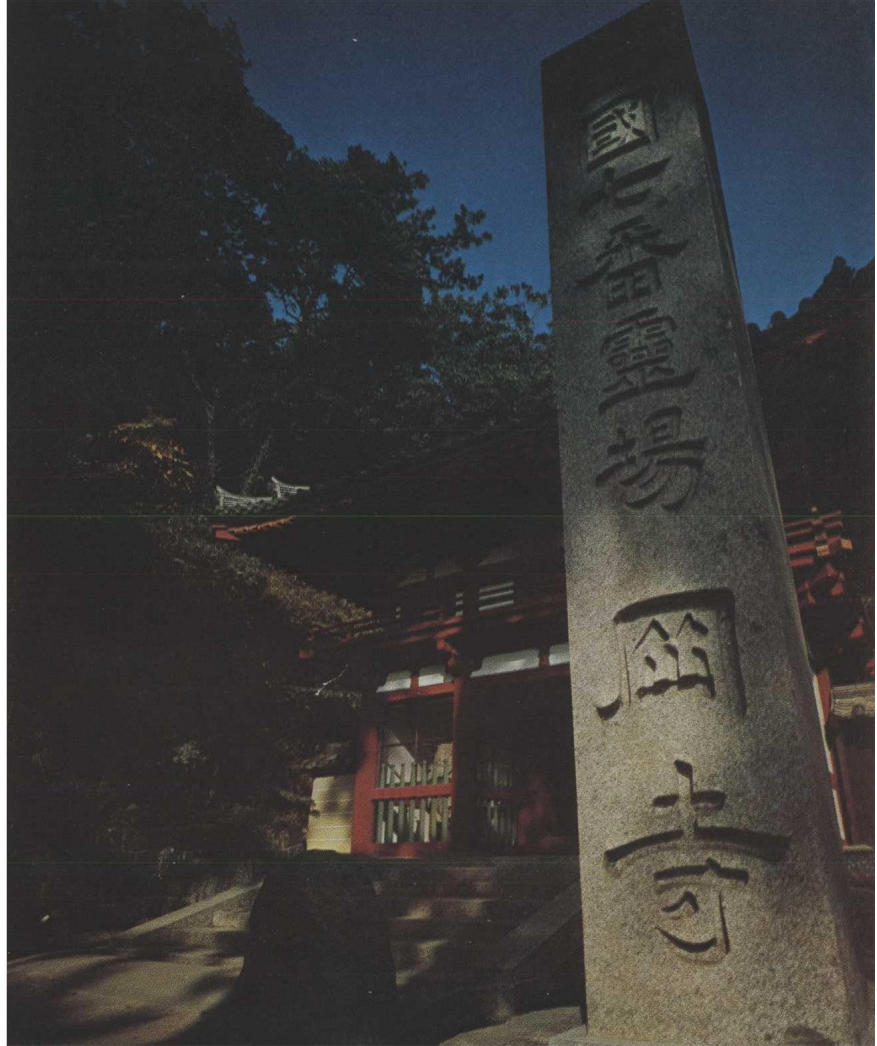
（「本所・両国」）

横網町の慰霊堂境内（当時、お竹倉といわれたあたり）

……一帯の山脈が、日に背いているせいか、かがやくべき残雪の光もなく、紫がかった暗い色を、長々となすっているが、それさえ蕭条たる、幾叢の枯薄に遮られて、二人の従者の眼には、はいらないことが多い。

滋賀・高島付近（芋粥）





譬えばあの男が竜蓋寺の門へ描きました、五趣生死の絵に致しましたが、夜更けて門の下を通りますと、天人の嘆息をつく音や噺り泣きをする声が、聞えたと申すことでございます。

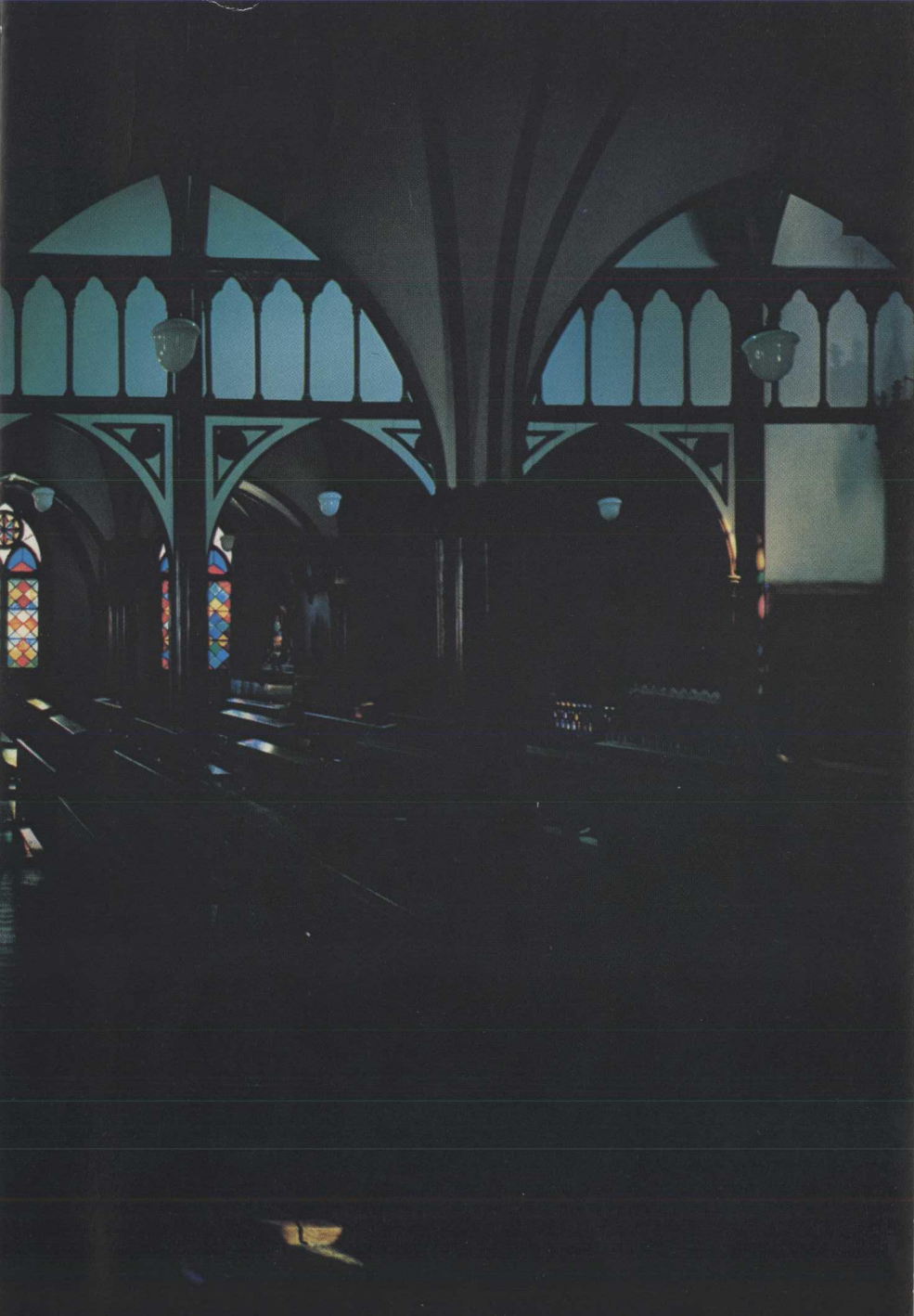
(「地獄変」)

奈良・竜蓋寺(別名岡寺)

松江の家並み。矢道湖に浮んで見えるのは嫁ヶ島。

(「松江印象記」)







天主堂の内陣に入れば、耶穌受難の色硝子画、薄暗き中に仄めけるを見る。（「長崎日録」）

長崎・大浦天主堂の内陣



此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com